アフリカの砂の大地をディフェンダーで行く

「ナミビア」という国は日本人にはほとんど馴染みのない国だろう。
そのナミビアの地をランドローバーが駆け抜ける。
空の青と砂のベージュの世界、文字通りの砂の海をたくましく生き抜く動物たちを求める
「ADVENTURES」は、ランドローバーの真の実力を思う存分に発揮する旅である。

Text　Osam Morikawa

第二の故郷アフリカでのツアー

プレミアムブランドはどのようなジャンルのものであっても、そのヘリテッジとともに、その製品が真の魅力を発揮するフィールドを大切にしている。そのシーンが多くの人々を魅了し、ファンを育成するからだ。

世界で唯一、4×4（フォーバイフォー、つまり四輪駆動車）のみを五十年以上にわたって造り続けている頑固なブランドがある。英国の老舗ランドローバーだ。現在では、世界中のセレブリティに愛され、高級ホテルに乗りつけられる「レンジローバー」から、若い人が気軽にオーバンユースを楽しめる「フリーランダー」まで製造するランドローバー社だが、その「リティッジを大切にし、真の4×4性能、オフロード性能には決して妥協を許さない。しかし、今では日本はもとよりヨーロッパでもアメリカでも、そのオーナーが性能をフルに発揮させることのできるチャンスがなかなかないのも事実だ。

そこでランドローバー社では、そのオーナーやファンに『真のランドローバーの世界』を体験できる「ADVENTURES」と呼ばれるツアーを世界各地で提供している。手軽なものでは英国バーミンガム近郊ソリハルのランドローバー工場の一角にあるテストコース（その過酷かつ自然を活かしたコースレイアウトから「ジャングルトラック」と呼ばれる）への日帰りツアーから、スコットランドの古城に泊り、その広大な領地でオフロード・ドライビングや英国伝統のアウトドアレジャーを楽しむツアー、さらには一週間から十日をかけてのアメリカンロッキー越え、ベリーズのジャングルに分け入って巡るマヤ遺跡の旅、オーストラリアのアウトバックの旅、ボルネ

オの熱帯雨林、ヨルダンの砂漠縦断など、いろいろと用意されている。

今回参加したのは、そのADVENTURESのなかのアフリカはナミビアで行われている壮大なツアーだ。アフリカはランドローバーにとっては第二の故郷とも呼べる土地。現在でこそ、ランドローバーを追って登場してきた日本製の4×4も増えたが、以前はアフリカが舞台のドキュメンタリーや映画には必ずランドローバーが登場した。日本では戦後の歴史から4×4のクルマの一般名称として「ジープ」という言葉が使われてきたが、アフリカではああいうカタチのクルマは「ランドローバー」なのである。

三六〇度の地平線

アフリカの大西洋岸、アンゴラと南アフリカにはさまれたナミビアへは、ヨーロッパからはフランクフルトからミュンヘン経由で首都ヴィンドゥクへエア・ナミビアが747-400を週に二便ほど飛ばしている。ナミビアは古くはドイツの植民地で（その後一九九〇年までは南アの支配下にあった）、その名残りであろう。ヴィンドゥクをはじめ、ドイツ語の地名も多い。

巨鳥747-400の他に一機の飛行機もない空港を出ると、駐車場にはこれからの長い旅の友となる純白の「ランドローバー・ディフェンダー」が十数台、ひどく強いアフリカの太陽を反射しながら整列してわれわれを待っていた。

空港を出てヴィンドゥクの街並みを十分足らずで通過すると、もうそこは乾いた大地。最初の宿となる郊外のオカブカ・ランチは首都からほんのわずかの距離だが、そこはわれわれ日本人の眼からするとまさに大自然の中にある。野趣に溢れてはいるが洒落た造りのレセプションハウス（とはいっても藁葺き屋根で周りの壁はない、いわば巨大なあづま屋？）と宿泊用のコテイジが並んでいる。ここの広大な裏山で半日にわたってオフロード・ドライビングの手ほどきを受けたのだが、この間にも小さな池を泳ぐクロコダイルをはじめ、ウォーターボックやクードゥなどの大型カモシカを間近に見ることができた。

翌日はこのランチが放し飼い飼育をしているライオンの餌付けを見学した後、ナミビアの大地を大西洋に向けてコンボイ走行が始まる。幹線ルートは、舗装こそしてはいないがとてもよく整備されていて走りやすい。ただ、景色は「均一」で、行けども行けども乾燥した大地に灌木のみ。やっと変化がでたのは、半日も走って、ナミブ砂漠に入ってからだった。でも、変化とは灌木がなくなったこと。ちなみにナミブとは現地語で「ナニもない」を意味する。ここでディフェンダーを止めて

砂漠に立ってみると、三六〇度地平線で、地球の大きさを実感する。ということは自分の小ささも。

この日最後のハイライトは大西洋の一歩手前に横たわる、夕日を受けてオレンジ色に輝く巨大なナミブの砂丘。4×4といっても、サラサラの細かい砂の急坂を駆け上がり、下るのは容易ではない。いとも簡単にスタックする。しかしインストラクターはとても熱心に走り方を教えてくれ、いったんコツがわかると、走破性能が抜群に高いランドローバーでのこの砂丘遊びはとてつもなく気持ちが良く、楽しい。つい遊びすぎて砂丘の上で陽が落ちてしまった。

ランドローバーは「Gas-Pedal」つまり「大地を優しく踏む」をスローガンとし、4×4であるからこそ自然を大切にする走りを訴えている。できるだけホイールスピンをしなくて済むような性能のクルマ造りから始まり、オーナーにも自然を傷めない走り方を求めている。ここの砂丘では風による砂の移動で、ついた轍はふつう一日できれいに消えてしまうので安心なのだそうだ。

東京から京都くらいの距離の未舗装路を二日でこなして、大西洋に面したリゾート地、スヴァコプムントのホテルに到着した。埃まみれの身体をシャワーで流したわれわれを待っていたのは、なんと、素晴らしいフランス料理のディナーだった。ただし、肉はフレンチでいう「ジビエ」ものが多いところがやはりアフリカだ。

ただ、砂のベージュ色

翌朝はセスナの編隊で北へむかう。眼下に果てしなく広がるのは乾いた大地にのたうつ完全に干上がった川の流れ。タマラランド、

キャンプ近くのダートのエアストリップに降り立つと、そこにはなんと昨日乗っていたディフェンダーの隊列がわれわれを待っていた。ランドローバーのスタッフ達が夜通しかけてここまで移動させてきてくれたのだ。感激。

ここからは少し樹が増えてはいるが、やはり乾いた大地をエトシャ国立公園にむけて進む。小柄で白いストライプがきれいなスプリングボックの群れが多い。強い陽射しの下、このあたりに出没するというデザート・エレファントの影を追いながらのドライブ。そういえば、ここナミビアに着いてから、まだ雲を見ていないかもしれない。象には出会えなかったがキリンに遭遇。こんな大きな動物がまだ生きていられる環境に感謝。

ワジと呼ばれる干上がった川をいくつも横切る。干上がった川床は深い砂で、ナミブの砂丘で覚えたドライブ・テクニックが役に立つ。先頭のインストラクター車がワジを横切らずに中に入った。ここから砂の川床を溯るという。前車の巻き起こすものすごい埃で前がよく見えない。ちょっと溯ってみるだけかと思ったら、そのまま陽が暮れるまで、なんと三時間近く川床を全開で走りっぱなし。要するに道路がわりだ。クルマも室内も人間も持ち物も(カメラも!)すべてベージュ色だ。途中でガイド車が急停車。砂の上に真新しい象の足跡を発見したのだ。

川床から這い上がると暗闇のなかにホバテレ・ロッジが現れた。コテイジの数が足りず、私は外の草原に設営された一人用の小さなテントで寝ることになった。雨は考えていないので天井はメッシュだ。カール・ツァイス製のプラネタリウムにでも絶対に負けない天然プラネタリウムの下での一夜は、夜明けと同時の小鳥のフルヴォリューム合唱によるウェイクアップ・コールまで、素晴らしい熟睡を与えてくれた。

動物の色濃い国立公園

翌日は広大なエトシャ国立公園へ。ゲートで入園登録をしたあとは、いっさい自分のクルマから降りられないルール。それだけ動物が多いからだ。あとは自分の勘をたよりに何に出会えるかの競争だ。私のクルマはキリンのファミリーと接近遭遇。十数頭の群れには可愛らしい子キリンも。もうこのころになると、スプリングボックや、大柄のオリックス、あるいはシマウマ、バファローなんかには遭遇しすぎて感激もしなくなる。他のクルマが出会えたという象やライオンに会えなかったのは残念だが、貴重なチーターを一瞬見ることができて大満足。ランドローバーはここエトシャでの動物保護活動にも積極的に協力しているおかげで、一般は立ち入りが許されていないエリアにもADVENTURESは特別に立ち入りが許されている。

今日の宿、オンガヴァ・ロッジは素晴らしい見晴らしの丘の上に建つ瀟洒なコテイジ。動物が集まる水場を見下ろす素晴らしいテラスでのBBQも風流で、かつ美味しい。ただ、見てきたばかりの動物を食すのはちょっと…つらいかも。このロッジでは夜半から朝まではコテイジからの外出が厳禁されている。ここはそれだけ動物が濃い。まだ暗くなったばかりの時にちょっと表に出ようとドアを開けたら、ちょうどそこにオリックス(らしきもの)がいて、彼はびっくりしてものすごいジャンプをして逃げ去った。が、私も同時に飛び上がった。オリンピック級のジャンプだったかも。

翌朝はオンガヴァ・ロッジの領地内で、ディフェンダーにガイドが乗ってくれてライノ、つまりはサイを探しに出かける。ロッジの領地といっても広さはなんと東京二十三区の半分以上! 結果は見事発見。しかもライフルを構えたガイドのうしろについて風下から歩いて、サイに接近こっこ。こいつはなかなか緊張した。

ランドローバーは旅を通してタフで、実に頼もしい友だった。しかもナミビアの厳しい自然のなかで実に絵になるハンサムな友だった。そしてこんな非日常の体験をある意味では手軽に提供してくれるランドローバー社は、そのブランドを愛する人をとても大切にしながらブランドを育てているメーカーだった。